

原爆投下、60年を迎えて (2005 8 6 記)

原爆、敗戦以来、60年、親兄妹、友人、知己、そして同胞三百数十万人の犠牲を払い、戦後のあの困苦欠乏の悲惨な時代を生き抜いてきた者の一人として、いささか感懷を述べてみたい。そして二度と再びあの惨禍を繰り返さないため私達は何をなすべきか、そもそも、あの戦争に至った原因は何なのか、について考え続けてきた。

海軍砲術学校において終戦を迎えた私は、全滅した家族の葬儀、後始末をする間もなくマッカ～サ～の命により呼び出され、在外の軍人、邦人の引き揚げの業務を命ぜられ、米軍の軍需物資等の輸送業務にも従事させられた。五年後、私は、朝鮮戦争の最中だったが、やや強引に呼出電報に応じず、教師に転向した。若気の至り、過去の文部省の教育をぶっ壊してやろう、などと意気込んで文部省の研究指定校を選んで勤務し、各種研究大会、全国大会での発表を続けてきた。組合運動にも情熱を燃やしたが、意見の相違から日教組とは別組織の組合の結成にも奔走し、執行委員長も勤めた。五十歳を過ぎる頃から教師の限界を感じていたが、行政にたいしては批判的な言動が多かった私を県知事が勤労感謝の日に表彰してくれた。これを機に引退を決意し、一兵卒として市民運動に入ってしまった。

私は各種集会に参加しているが、その中で戦前の東アジアの状況について質問してみる。日露戦争においてロシヤの進出を食い止めた事までは知っていても、あの当時、東アジアがどこの植民地であったかについて殆ど無知に近いのに愕然とした。「大学入試に全くでなかったもので、、、」といわれる。独立を保っていたのは日本、タイだけ中国は混乱状態で上海ほか各地に租界があり半植民地の状況、満州は匪賊、馬賊の跳梁する極めて危険な所であった。ロシヤの進出を辛うじて食い止め、獲得した南満州鉄道の權益を守り開発してロシヤ、欧米諸国の侵略から東アジアを守ろうと努力する日本のあり方は当時青少年であった私達にも十分納得のいくものであった。五族協和をスロ～ガンとする満州国建設には皆共感をもっていた。しかし私達はその頃急速に台頭してきた右翼思想、皇国史観には必ずしも賛同していたわけではない。フランス映画やアメリカ映画に興味を持ち日本文学、フランス文学、ロシヤ文学の作品を論じあい、私自身もトルストイや白樺派の思想には共鳴する自由主義、社会主義的傾向すら持っていた。重苦しい空気を避けて自由な世界を求め友人、知人のなかには満州、上海の旅順工大、ハルピン工大、医科大、建国大、同文書院等に進学した者も何人もいた。知識人、文化人達も多数飛んだものである。資源の乏しい日本が欧米には撫順、鞍山の石炭、鉄鉱を開発し重工業を起し強国になることが侵略を防ぐ最良の策と思ったとしても当然であろう。朝鮮半島においても教